

主催者： さいたま市山岳連盟

報告： 正田 範満

## 夏山の山岳気象－観天望気と気象遭難－講習会の報告

**開催日時**：2012年6月23日（土）PM1時30分～4時50分

**場所**：北浦和ターミナルビル 3F 第一・第二会議室

**講師**：気象アドバイザー 城所 邦夫 氏

**スタッフ**：（受付）原卓、原真紀、山岸、正田緑（会場）田中、洞谷（司会）正田範

**参加者**：54名

**講習内容**：気象アドバイザーの城所邦夫氏の資料とスライドにより、夏山の山岳気象の特徴と観天望気により悪天の予知を行い如何に気象遭難から回避できるかを解説して頂いた。

①この五月の連休では大きな気象遭難があったが、低気圧が太平洋側に抜けても一時的な冬型となり、後方に寒気が入り込み、脊梁山脈では大荒れの天気となる。（縦縞の等圧線の再現）過去にも沢山の死亡事故があるので、気おつける必要がある。

②梅雨入りから盛夏（梅雨明け）の気圧配置をベースに解説、陽性型は梅雨の中休みがはっきりしており、登山のチャンスである。（北上型、南下型）山脈の風上側では雲が発達して悪天候になる。梅雨明けが近づくと豪雨が多くなる。

③梅雨が明けても雷と梅雨の戻りがあるので気をつける必要がある。梅雨明けして暫くは、夏の高気圧（小笠原高気圧）が安定しているので天候は大丈夫だが、8月に入ると山ではガスがかかるようになり、台風と雷に気を付ける必要がある。

④台風とは熱帯低気圧の中心付近の最大風速が $17\text{ m/s}$ を超えると台風何号と呼ぶ。夏台風は太平洋の高気圧がブロックしてコースの定まらないものが多く、俗に迷走台風と呼ぶ。台風には危険半円と可航半円（航海用語）とあり、左側半円は危険半円といって、風雨が強い。左側半円は右側半円より比較的風雨が穏かである。

### 暖候期の観天望気

①山の気温は標高が高くなるにつれて低くなる。（ $0.6^{\circ}\text{C}/\text{標高}100\text{m}$ 毎）標高 $3000\text{ m}$ では平地より、 $18^{\circ}\text{C}$ ほど低い。山での晴天時は昼頃までに最高気温が出ることが多い。午後から夜間にかけて気温上昇が有るのは天候が下り坂に向かい、気温が下がって来る時は回復に向かう。

②山の風は好天の時の昼は谷風、夜は山風が起きている。また、日の出とともに風は弱まって昼頃が最も弱い。そして、日没とともに次第に強まるのが基本である。この現象が乱れてくると天気は下り坂に向かう。

③山の天気現象 天気の周期は、年間を通して3日～4日位が多く、西から東に移動してくる。各山城共、平地に比べて天気が早く悪化し、回復が遅い。午前中は好天でも、午後からガスのかかる確率が高くなるので、山での行動は早立ち、早着きが基本である。

④落雷については、雷三日といって約3日間位続くケースが多いので、小屋などに入山の折に確認する。

⑤その他のケースでは、夏では淀んで遠くの間々がハッキリ見えにくい時は晴れ、逆に淀みが取れてハッキリ見えたり、近くに見えたりすると下り坂に向かう。

- ・虹やブロッケン現象が自分の位置より西に見えると、天気は近くで悪いか次第に下り坂に向かう。
- ・ 星の瞬きが夜毎に激しくなると、天気は下り坂にむかう。
- ・ 朝焼けや夕焼けの色が赤色よりも黒みかかった色に焼ける時は、天気に要注意である。
- ・ 遠くの(麓)物音が平素より良く聞こえたり、ハッキリ聞こえたりすると天気は下り坂である。  
例) 鹿島槍で大町の救急車の音や、八ヶ岳で小海線の電車の音が聞こえる様な時

**雲により観天望気** (パワーポイントにて雲の写真をみて観天望気の解説を行う)

### 山での気象遭難

- ① 低体温症 近年のトムラウシ遭難の事例等で頻繁に起こる。
- ② 雷の予知と対応 熱雷は暑い夏の午後に発生し、夕方から宵にかけて消滅する。界雷は温暖前線、寒冷前線に伴っていつでも起こる。熱界雷は両者をミックスしており、強くて長時間続く。盛夏にかかわらず早朝から秋空のように空が澄みきった状態になっている時は、上空に寒気が侵入している可能性が大きい。周辺の雲(雷雲・積乱雲)に注意し、遠雷が聞こえたり、雨がポツリと降ってきたら、雷雲の接近が間近と考える。
- ③ 雷の対応 安全な場所へ避難することを考える。山小屋等ではできるだけ中心に居り、柱の側は避ける。雷に出会ったら、行動を止め、姿勢を低くして安全な場所(低地)へ非難する。安全な場所とは地物の保護範囲をいう。保護範囲とは中心となる地物の高さと同じ長さの距離内で円錐型内を言い、中心の地物から数mの距離お置き、姿勢を低くして退避する。姿勢は低くし直接地面には触れない様にする。落雷時には側撃雷や側撃風が起きるので注意する。金属類は身から話さなくても良く、場合によっては落雷電流を避ける役目をする。尾瀬での雷事故はその日の天候や地形が良く分からないが、平地で雷避けができない場所穂では、雷の予報がある時は行動をしない事が一番である。雷にあった場合は、足を閉じて姿勢を低くして退避するしかない。  
その他、多くのご質問があつて、皆さんが気象への関心が高い事を伺える。